

焼酎を彩る酒器，テーブルウェアの開発

山田 淳人*，澤崎 ひとみ*，上原 守峰**

Development of liquor ware and tableware for shochu

Atsuhito YAMADA, Hitomi SAWASAKI and Morimne KANBARA

県内工芸品の生産額は総体的に年々下降傾向の中，全国的な焼酎のブームに伴い薩摩焼の「黒千代香」のみは生産増にある。しかし黒千代香のみでは将来的に頭打ちも考えられるため，工芸関連業界では焼酎周辺に関する新製品開発が求められている。そこで今の焼酎ブームをビジネスチャンスとして捉え，伝統的な黒千代香を含め，現代的な楽しみ方に沿った酒器・テーブルウェアの開発を試みた。カラーパリエーション展開や県内伝統工芸企業などとコラボレーションをすることで，鹿児島を代表する酒器や伝統工芸素材の持つ可能性を確認することが出来た。

Keyword：焼酎，酒器，テーブルウェア，千代香，焼酎ブーム

1. 緒言

薩摩焼は，島津家の御用窯として始まり，約400年の歴史を持ち，白薩摩と黒薩摩に大別できる。白薩摩は，貫入と呼ばれる細かいヒビが入った淡い象牙色の素地に，華やかな絵付が施されたものや，繊細で緻密な「透し彫り」が施されたもの，また素地に赤や青，緑や金彩を施した「金襴手」などがあり，壺，香炉，茶器など，主に藩主御用達向けのものである。対して黒薩摩は，鉄分の多い火山性の土などを用い，力強く重厚で，庶民の日用雑器を中心として焼かれたもので，どちらも鹿児島に根ざした伝統的工芸品である。業界の動向としては，平成9年に鹿児島県陶業協同組合が発足し，平成14年には「経済産業大臣指定伝統的工芸品」に指定され，現在に至っている。県内の工芸品の生産は相対的に年々下降傾向であるが，全国的な焼酎のブームに伴い，薩摩焼の黒薩摩の代表的酒器である「黒千代香」は生産増の傾向にある。しかし黒千代香のみでは将来的に頭打ちも考えられるため，工芸関連業界では焼酎周辺に関する新製品開発が求められている。また焼酎ブームをビジネスチャンスとして捉え，伝統的な黒千代香を含め，現代的な楽しみ方に沿った酒器・テーブルウェアの製品開発を試みた。

2. 熱衝撃に強い黒千代香の開発

2.1 素地の調合

現在販売されている千代香には，直火用と非対応のものがある。千代香を買い求める購買層には，昔の千代香は火に強かったというイメージが根強く，古来の粘土と同様なもので熱に強いものが欲しいという声がある。そこで，薩

摩焼の歴史の中で直火に強いと言われていた苗代川焼の伊作田粘土，神之川粘土を想定し，市販品の中から吸水率の近い陶土2号（白）と紅土5号の2種類を選び，試験を行った。試料名と給水率ならびに焼成条件等を表1に，スラリーの調整条件を表2に示す。

表1 試料名と吸水率

試料名	吸水率 (%)
井作田粘土	10.0
神之川粘土	9.3
陶土2号	7.8
陶土2号80% + カオリン20%	8.7
紅土5号	3.4

焼成温度1250（酸化炎）釉薬の調合割合（シラス50・石灰石20・カオリン30・弁柄10・マンガン2）

表2 スラリーの調整

	試料名
A1	陶土2号白
A2	陶土2号白（ペタライト15%含有）
A3	陶土2号白（ペタライト20%含有）
A4	陶土2号白（カオリン20%含有）
B1	紅土5号
B2	紅土5号（ペタライト15%含有）
B3	紅土5号（ペタライト20%含有）

分散材0.5% m 成形 石膏型排泥鑄込み

*デザイン・工芸部

**デザイン・工芸部(現 大島紬技術指導センター)

2.2 熱衝撃試験の結果と考察

水を入れた千代香をガスレンジ直火で沸騰させた直後、冷水中に投入することを1サイクルとし、繰り返し試験を行った。熱衝撃試験の様子を図1にその結果を表3に示す。

B1の紅土5号と陶土2号の一部に亀裂が生じた。陶土2号にカオリンを加えたものとペタライトを15%~20%含有したものは、直火試験を繰り返し行っても亀裂は見られなかった。低膨張性質ペタライトは陶土2号、紅土5号いずれも直火に対する効果は高く、焼結が進むため水漏れも少なくなる傾向を示した。陶土2号(白)は単体よりもカオリンを添加した方が耐熱衝撃性が増す傾向を示すが、ペタライトを添加したものに比べ、吸水率が高くなるため微量の水分の滲みが見られた。紅土5号は2サイクル目に亀裂が生じた。陶土2号系との相違点は耐火度(熱伝導率等)の差と思われる。釉薬に用いたカオリン質マト釉は、直火による貫入発生が少なく、器物の内側がシールされることで素地の吸水率が大きくても水漏れ防止の効果があることが分かった。ペタライトなど低膨張質の材料を用いず直火に強い粘土としては、伊作田粘土や神之川粘土など石英やカオリナイトを主成鉱物にし、ある範囲以上の吸水率(断熱効果)が高い原料が適していることが分かった。出来上がった黒千代香を図2に示す。



図1 熱衝撃試験の様子(写真は素地試験の様子)

表3 熱衝撃試験結果

	試験結果
A1	1サイクル途中で亀裂が発生した。
A2	亀裂発生なし
A3	亀裂発生なし
A4	微量の水分の滲みが発生した。
B1	2サイクル目に亀裂が発生した。
B2	亀裂発生なし
B3	亀裂発生なし



図2 出来上がった黒千代香

3. 千代香のカラーバリエーション提案

県内の窯元では、窯元独自の釉薬で様々な千代香が製造されているが、窯元ごとの単品製造のためバリエーション展開に乏しく店頭などでPR効果が薄い。そこで、同一の型を用いカラーバリエーションを付加した千代香を製作した(図3)。鹿児島を売り出すキャッチコピーに西郷隆盛(Saigo)、桜島(Sakurajima)、焼酎(Shouchu)、温泉(Spa)、スローライフ(Slow life)、スローフード(Slow food)、新幹線(Shinkansen)の頭文字をとって7Sという言葉がある。バリエーションをおこす上で、この7つのキーワードをイメージしての制作を考慮したが、抽象的なキーワードも存在するので、7Sの「7」に注目し鹿児島にゆかりのある7色で、カラー展開を行った。色名と鹿児島からイメージしたものを表4に示す。

表4 千代香の色と鹿児島からイメージしたもの

色名	鹿児島からイメージしたもの
赤	火山、さつまいもの皮、マグマの色
青	奄美の海、黒潮
緑	屋久島、全国森林浴の森百選、知覧の茶畑
黄土	北薩摩の米処稲穂の色、日本の棚田百選
桃	上場高原コスモス、鹿屋のバラ、忠元公園の桜
茶	豊穡な大地の色、芋畑
水色	千尋滝、大川の滝、名水百選

「握り」に関しては、色彩等との調和を考えて撥水加工を施した市販の紐を平編みにした。従来「握り」には蔓や須等に使用されるビニール製の既製品が使われていたが、蔓は近年入手が困難になってきている。今回試作した「握り」は千代香の風合いを活かす有効な手段であると思われる。工芸関係の企業を対象にモニタリングも行ったが、桃色の千代香の反応が女性層に支持された。(図4)千代香のカラーバリエーション展開は、現在市販されている千代香との相乗効果も期待できる。



図3 千代香のカラーバリエーション展開



図5 奄美の自然をイメージした酒器セット



図4 モニタリングで好評だった桃色の千代香



図6 大島紬の柄をイメージしたテーブルウェア

4. 黒糖焼酎を楽しむ酒器・テーブルウェアの試作

黒糖焼酎は、黒糖を原料として奄美諸島にのみ製造が認められた焼酎であり、独特の口当たりが、近年人気を得ている。黒糖焼酎を楽しむ酒器は、カラカラなどがあるが、県内の窯元などでは、黒糖焼酎を楽しむ酒器作りに取り組む企業は少ない。そこで、奄美の海や自然、特産の奄美大島紬の代表的な籠郷柄などをモチーフにした酒器セットやテーブルウェアなどを試作した。(図5, 図6) 奄美の自然をモチーフにした酒器セットは、砂浜などで、砂に挿して楽しめるように、器の底が尖っている特徴を付加した。

今回の試作は、自然と大島紬にイメージを絞ったが、奄美をイメージさせるものは、多種多様に渡るため、他のイメージを利用した商品も可能と考えられ、今後独立した研究テーマでの取り組みの可能性も浮き彫りとなった。今後は、陶業組合関係者や工芸関係の企業だけでなく、酒造関係の企業などにも意見を聞く機会を設け、商品化やノベルティ商品への展開などの可能性を探っていく予定にしている。

5. 陶胎漆器(千代香)の試作

鹿児島県には薩摩焼同様、国の伝統的工芸品に指定されている川辺仏壇がある。川辺仏壇は、木地、宮殿、彫刻、金具、蒔絵、塗装(塗り)、仕上げの7工程があり、それぞれ独立した分業体制がある。特に塗装(塗り)の分野は様々な表現方法が可能でことと対象を選ばないことから、様々な工芸分野とコラボレーションが出来る可能性を持っている。そこで、川辺仏壇の漆塗りの企業と薩摩焼の企業と共同で、焼付漆を施した陶胎千代香(図7)を試作した。

この陶胎千代香は展示会に出品し、釉薬では表現できない独特の光沢と質感が来場者の目を引き好評であった。



図7 陶胎千代香

6. その他のテーブルウェア関係の開発

本研究と並行して県内の工芸関係の企業を対象に焼酎にまつわる商品開発の支援を行った。中には特産品コンクールなどに出品するなどして好評を得たものや、定番商品となったものもある。焼酎用トートバッグ(図8)は、近年のエコロジーを意識した商品であり、ホームパーティなどにも持って行けるよう女性でも気兼ねなくもてるデザインをした。帆布を利用し県内よりも県外で人気があり、物産展などに出品すると完売するなど好評を博している。

焼酎瓶型照明器具(図9)は、焼酎ブームに伴い製造蔵元がクローズアップされており、蔵元のショールームや焼酎を専門に提供する焼酎バーなどのディスプレイ用に和紙工房と共同企画した試作品である。照明をつけない時は、オブジェとしても使用できる。柿渋を塗布し着色されたものなどバリエーションも増え、工房の定番商品として根付いている。



図8 焼酎用トートバッグ(一本用, 二本用)



図9 和紙を使った焼酎瓶型照明器具

7. 結 言

今回の研究を通し、カラーバリエーションや県内の伝統工芸企業などとコラボレーションをすることで、鹿児島を代表する酒器や伝統工芸素材の持つ可能性を確認することが出来た。今後は、試作品をベースに窯元や製造企業との意見交換を通し、開発企業が焼酎関連商品の商品開発をする際の一助となるようにしていきたい。

焼酎関連商品の開発は、県内の陶業関係企業だけでなく、他の工芸企業も取り組みが可能であるが、県外産地などでも多く取り組みが見られ、その流通量や価格など県内の窯元や製造企業には太刀打ちできない面も見られる。しかし、焼酎を生み出した風土は鹿児島独自のものであり、焼酎を育んだ風土から生み出された商品は取り組みをPRすべきである。焼酎は海外へも輸出されはじめており、海外でも人気が出る可能性も秘めており、焼酎を楽しむ文化や背景もクローズアップされると確信している。焼酎だけでなく、焼酎を楽しむ酒器や文化も一緒に提供することで、焼酎業界だけでなく、工芸業界、観光業界なども同時に脚光を浴びると確信する。

謝 辞

研究を進めるに当たり、千代香の型を貸与いただいた鹿児島県陶業組合理事長西郷隆文氏に謝意を表します。